

ロキ・ファミリアに問
題児が来るそうです
よ？

ジ・アビス・シーカー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アジィダカーハとの戦いにより、命を落とした十六夜。彼は神様の力により新たなる世界に転生することになる。

十六夜の転生した、世界。その世界には「ダンジョン」が合った!?
十六夜が、ダンジョンに挑む話が今始まる!

目次

1 話	問題児転生	1
2 話	いざ、地上へ!	10
3 話	ホームへ帰ろう	18
4 話	入団試験	25
5 話	亀裂	32
6 話	新たな約束	38

1話 問題児転生

それは、一瞬の出来事だった。

逆廻十六夜は黒ウサギの放った第六宇宙速度の帝釈天の槍を受け止めた。

しかし、今までの激しい戦闘でのダメージに加え、帝釈天の槍の攻撃を受けては、流石の十六夜でも瀕死の重症に陥ってしまった。

「チツ：： やっぱりこうなるか：：： まあ、初めからわかってたけどな：：）」

激痛で視界が赤く染まり、意識が飛びそうになった。

その時、飛鳥と春日部の悲鳴が聴こえた。

その悲鳴を聞いた十六夜は、このままじゃ終われないと、気合で遠退きそうになる意識を繋ぎ止めた。

「責めて、後少しでいい！保ってくださいよ！俺の命ッ！」

体が思うように動かない。それでも、大切な仲間を守るために無理矢理動かす。

「これで終わりだーアジィダカーハッ！」

そして、十六夜はついにアジィダカーハの心臓に、その槍を深々と突き立てた。

「見事だ：：」

アジィダカーハの何処か満足げな声が聴こえた。

そして全て出し切り途切れゆく意識の中――最後に、十六夜を殺してしまい罪悪感で、泣きじゃくる黒ウサギの表情が瞳に映った。

「(ハツ……なんつう顔してんだよ黒うさぎ……… すまん、約束守れなかった)」
そこで意識が途絶えた。



「……此処はどこだ？」

意識を取り戻した十六夜は、ひどく殺風景な場所にいた。

何処までも広く、何処までも黒いく、何処までも続いてそうな場所だった。

「なんだって俺はこんな所に居るんだ。確か俺はアジィダカーハと戦って……」

――その質問には私がお答えしましょう。

突如後ろの方から女性の声が聞こえた。同時に闇が晴れる。黒が白に変わっていく何処か神秘的にも見える変化を見届けた後、ゆっくりと振り返る。

そこには銀髪に蒼い髪を持つ女性が座りながら微笑んでいた。

「あんたは……誰だ？」

警戒しつつ訊ねる。女性は静かに口を開いた。

「私の名前はエリス。女神です」

エリスと名乗った女性はそう言って軽く頭を下げた。

「ふーん。あんたが女神ね……それで神様が俺の前に居るって事は、要するに俺は死んだって事か」

死に際を思いだし、現状を理解するように言葉にする。その言葉を聞いたエリスは一瞬悲しい顔をした。しかし、すぐに真面目な顔をして頷いた。

「やっぱりそうか……いくつか聞きたい事がある」

「はい、どうぞ」

十六夜は心残りだった事について、エリスに訊ねるべく口を開いた。

「そんじゃ、まず一つ。アジィダカーハは倒せたのか？」

「はい、貴方のおかげで倒せました」

「そんじゃ次。俺が死んでからどれくらい経った？」

「二ヶ月です」

「ノーネームはどうなった？」

「リーダーのジンⅡラツセルが行方不明になりましたが、同盟コミュニティのおかげで辛うじて立ち直れました」

「何？ 御チビが行方不明だと!? チツ、引き際を見誤りやがったか……」

思わず声を荒げるも、気を落ち着かせて続きを言葉にする。

「最後に一つ。何故俺は此処に居るんだ？」

「それは……貴方には2つの選択肢があるからです」

「選択肢？」

オウム返しに訊ね、続きを促す。

「はい。一つ目はこのまま天国に行く事。もう一つは別の世界に行く事です」

「別の世界だと？そこはどんな場所だ？」

「はい。その世界にはダンジョンがあり、数多の生物が住んでいます、ギフトゲームは存在しません」

「ハッ！面白そうな世界じゃないか。特にダンジョンつてのが気に入った」

「そうですか！じゃあー」

不敵な笑みを浮かべる十六夜に喜びを顔にするエリス。それを見た十六夜は笑みを消す。

「ただ、何故俺をその世界に転生させようとするのか、理由を聞いてからだ」

エリスの言葉を遮り、静かに問い掛ける。

「そ、それは……い、十六夜さんに面白可笑しく生きてもらおうと……」

何処かで聞いたような事を言っている、エリスを見て十六夜は確信した。

「これは推測だが、その世界は何らかの原因で滅びかけてんじやねえのか？」

「……何故、そう思うんですか？」

「それは――俺の力が世界を救う力だからだ。だからこそ俺に選択肢を与え、興味をひくような説明をした。つまり、そういう事だろ？」

「……フフ、流石ですね。確かに十六夜さんの言った通り、その世界には危機が迫っています。ですが、それが何なのかまでは分かっていません」

エリスは微笑みながら自分の知る限りの事を全て打ち明けた。

「危険だからこそ、他ならぬ十六夜さんをお願いしたいんです。行つて……くれますか？」

エリスのすぎるような眼差しを受け、十六夜は何処か懐かしさを覚える。そして、決意を口に出す。

「いいぜ、完膚なきまでに俺が救つてやるぜ！」

「有難うござい――」

「――ただ、その世界は面白いか？」

再びエリスの言葉を遮つた十六夜はいつか言ったのと同じ言葉を投げ掛ける。その質問にエリスは少しの間、固まっていたが……

「はい。女神エリスの名において保証致します」

エリスは黒ウサギを彷彿とさせるような笑みを浮かべると、そう言った。

「……そうか、じゃ……そろそろ連れてつてくれよ」

痛んだ胸にそつと触れ、背を向ける。

「分かりました……それでは、世界を救ってください」

何処か悲しそうな声音で告げられた言葉を最後に十六夜は軽い目眩を覚える。そして、次の瞬間には見覚えのない洞窟に立っていた。



ーブモオオオオオオオオ

後ろの方から謎の声が聞こえてくる。

まるで牛のような泣き声だ。

「なんだってんだいきなり」

振り向くとなんとそこには、ミノタウロスと、そのやや後方に、その化け物を追いかけている人らしき影が2つ見えた。

「おいおい！箱庭で色々な生物とあつたがあんなの初めてあつたぞ！いいな！いいな、おい！この世界も楽しそうじゃねえか！」

そう言つて寧猛な笑みを浮かべながら拳を構えたところで、ミノタウロスを追いかけ
ていた片方の奴に、声をかけられた。

「おい！逃げろ！」

声を掛けて来たのは、狼耳の男だった。

「獣人かなんかか？」

「――逃げて」

もう片方にも声を掛けられた。そちらは、金髪に体のラインを強調させるような服を
きた美女だった。

「日本人じゃないな？となるとやっぱり異世界決定だな」

そんなことを考えていると、ミノタウロスと十六夜の距離は、残り5メートルくらい
のところまで縮まっていた。

「少しは楽しませてくれよ！ミノタウロス！」

その言葉と同時にミノタウロスは、十六夜に殴りかかった。

「ハッ……：しゃらくせえ！」

十六夜はミノタウロスの拳を、避けることをせずに、寧ろミノタウロスの拳に、己の
拳を叩きつけた。

すると、ミノタウロスの体が跡形もなく消し飛んだ。

比喩ではない字にして字のごとく、吹き飛んだのだ。

「……………っは？おいおい嘘だろ！そんな見た目しといて、これでおしまいかよ！」

「お、お前…いい、今……………何をした…」

いつの間にか十六夜の近くに来ていた狼男と金髪は、十六夜にそう問いかけてきた。「何したってつっても、ただ殴っただけだ」

「……………ッ！」

「……………名前なんて言うの？」

絶句する狼耳男。それを気にせず、金髪美人が十六夜に話しかけてきた。

「人に名前を聞くときはまず自分が名乗るもんだぜ」

「う……………ごめん、アイズ・ヴァレンシユタイン」

「け……………ベートロローガだ。で、見るからに野蛮そうなお前は」

「見た通り野蛮で凶悪な逆廻十六夜です」

それぞれが自己紹介が終わった所でアイズが聞きたかった質問を切り出した。

「十六夜……………なんでこんなところにいるの？」

「さーな、分からん？」

「分からんって、自分からじゃなきや此処には入れないだろが！」

「後、十六夜は何処のファミリアに入ってるの？」

そうこれがアイズたちは一番気になっていたことだ。

本来Lv2のミノタウロスを、一撃で倒す様な、しかも殴っただけでミノタウロスを、粉々にするような冒険者なら少し位名前を聞いたことがあるはずなのだ。

しかし逆廻十六夜と言う名前なんて聞いたことがない。

「いやそんなのは入っていない」

「!?」

「おい、嘘だろ!!」

「ここで嘘言ってもしょうがないだろ」

二人が驚くのも無理はない。

この、ダンジョンに住まうLv.2以上のモンスターを倒すには、ファミリーに所属していなければ絶対に、不可能な^レだから。

十六夜の解答を聞いてから、アイズは少し考える姿勢を取ったあとに、何か閃いたのか口を開いた。

「……じゃあ私たちのファミリア来ない?」

そう言って、可愛らしく首を傾げた。

2話 いざ、地上へ!

「(ファミリアか：．．おそらく、コミュニケーション的なものだろう。この世界のことを何も知らない現状を鑑みれば、コミュニケーションに所属するのは悪くないな)」

この世界に転生してすぐの十六夜にとって、ファミリアへの勧誘はありがたいものであった。

何故なら、右も左も分からない状況、ましてやここから出る方法さえわからないのだから。

「いいぜ、そのファミリアってのに入ってやるよ。だが、その前に3つ質問させろ」

「：．．うん、いいよ」

「言ってみろ」

アイズとベートは別に構わないようなので、十六夜は一つ目の質問をした。

「そんなやお言葉に甘えて、1つ目ファミリアってなんだ？」

この質問を聞いてアイズとベートは、質問の意味を理解するのに時間がかかった。

しかし、質問の意味が分かった瞬間、時間が止まった。

実際に時間が止まったわけではない。

ただ、場が静まり返ったのだ。

「はあああ？テメー、ファミリアも知らねえのかよ！」

この世界にはファミリアと言うものを知らない者はいない。

そのくらい、この世界ではファミリアは一般常識なのだ。

「本当に……そんなこと聞いているの？」

「大方予想は付くが、詳しく知っておきたい」

「たくしようにねえ。いいかファミリアていうのは下界に降りた神が恩恵ファルナと引き替えに、人々を集めて組織した。それが、ファミリアだ」

「なるほど、大体理解した。じゃあ、2つ目だ。ここはどこだ？」

「本当に……そんなこと聞いているの？……もしかして私達のこと、からかっている？」

「ハッ。まさか、そんなくだらない嘘は付かねえよ」

「ここはダンジョン。世界で唯一モンスターが湧き出る未知なる穴。当然死者もたくさん出る。」

「じゃあ、なぜわざわざそんな危険な所に行く？」

「それは……このダンジョンに住むモンスターを倒して手に入る。この魔石を取るためだよ」

アイズは喋りながらポーチ弄り、透明な紫色の石を取り出して十六夜に渡した。

「なるほど、これが魔石か……」

十六夜はソレを様々な角度から観察して見た。

「確かに綺麗だが、価値があるようには見えないな?もしこれが、ダイヤやルビーのような宝石でも、お前らの説明を聞く限りたくさん手に入るらしいしな?」

十六夜にとって、この魔石はただの綺麗な石、所詮そこ止まりにしか思えなかった。とても、命の危険を犯してまで取りに行く価値など見て取れない。

「いいか、その魔石は加工する事で、熱を出したり電気を出したりするようになるんだ」
ベートが説明したとおり魔石その物は、まるで役に立たない石ころである。

だが、加工をする事で様々な生活をするために必要なものになるのだ。

「そんなじゃ最後の質問。最近変わったことはないか?そうだな……例えば、世界が滅ぶようなこととか」

「どうしたいきなり?…そうだな敷いて言えば、お前が存在していることだな」

「ヤハハ、おいおい喧嘩売ってるのか?一発で終わらせてやるよ」

十六夜はとても愉快そうに笑って、肩を回し始めた。

「お前に売るもんなんてねえよ」

ベートは横に転がってるミノタウロスの残骸を見て冷や汗を書いた。

「(……悔しいがこいつには勝てる気がしねえな)」

「…特に、ないかな？」

続いてアイズも質問に答えた。少し考えていたが特に思い当たる物はなかったらしい。

「そうか、そんなじやお前らのファミリアに連れてつてくれよ」

「…うん、わかった」

あらかた話が終わると、アイズを先頭に向かう出口に向かって行った。



地上

「ハッ。マジかよ、あそこ地下だったのか!」

地上に出た十六夜を出迎えたのは眩しい日差しだった。

先程まで薄暗いところに居たせい、いつもより一層眩しく感じる。

「おっ！アイズウウウ」

日差しに目がなれてきたところで、何処からか声が聴こえた。

声のした方向を向くとそこには、露出度の高い服を着たアマゾネスらしき者が、手を大きく振りながら、こちらに向かつて走って来ていた。

「ん? そっちの服がボロボロの人は誰?」

十六夜は言われてやつと、アジッダカーハとの戦いのとときと同じ服を着てることに今更ながら気がついた。

(たく、あの女神せめて服ぐらい直しとけよ。今度あつたらイジリ倒してやる)

あれこれイジる方法を考えているとアイズがティオナの質問に答えてくれた。

「十六夜つて名前らしい: ファミアリアに入れようと思つて連れてきた」

「へへよろしく私の名前はティオナ・ヒュリテ」

ティオナは満面の笑みをニヒヒと言いながら浮かべた。

「よろしく、ところでファミアリアには入団試験とかあるのか?」

そのに対してティオナは無駄に元氣一杯に答えてくれた。

「うんあるよ! でも試験はいつも違うからどんな試験になるかは分からないんだ!」

「その試験は誰が決めるんだ?」

「フィンとかリヴェリアとかガレスだよ」

「誰だよそいつら?」

「え？ウソオオオオ十六夜フィン達の事知らないの！すっごい有名なのに！」

その時、少し遠くの方から声が聞こえた。

「テイオナ、アイズこんなところにいたんだね」

そこに居たのは、背が小さい金髪の少年を先頭にした100人以上の集団だった。

「あ、フィン丁度よかった。あの先頭に居るのがフィンだよ。そして、そして、その少し後ろに居にいて杖を持つてるのが、リヴェリア。そして、リヴェリアの近くに居る、見るからにおじさんなのがガレスだよ」

「ハハ、随分と大雑把な説明だね。さつき紹介されたフィン・ディムナだよ。よろしく」
フィンは笑みを浮かべ愛想よく十六夜に手を差し出してきた。

「逆廻十六夜だ。よろしく」

十六夜もそれに対して手を出し、お互いに軽く握手を交わす。

「ところでアイズ、どうして十六夜を連れてきたんだい？」

「ファミリアに入ってないらしいから」

「だから僕達のファミリアに入れようとしたんだね」

「うん」

「ん〜僕は良いけど、リヴェリアはどう思う？」

「私は異論は無い……ただアイズ、十六夜をどこから連れてきた？」

リヴェリアの疑問は、当然だろう。

先程までダンジョンに居たはずのアイズ達が、見るからに冒険者には見えない格好のした、少年を連れてきたのだから。

「ダンジョンでミノタウロスを追いかけてるとき十六夜とあって、そのまま連れてきた」「ファルナを持たないでダンジョンに入るとは、バカなのかこいつは!」

リヴェリアは十六夜を叱りつけるように怒鳴りつけた。

「そこをアイズが助けたんだね」

フィンに分かつてはいるが事実確認をするためにアイズに確認を取った。

「違う。十六夜がミノタウロスを殴り飛ばした」

「!?!」

しかし、返ってきた返答はよそうすらしていないものだった。

「それは: : 本当かい?」

フィンが険しい表情をして十六夜を見た。

「本当だぜ。てか、さつきから大人しく聞いてればバカだの随分言ってくれるじゃねえか」

少し不機嫌そうな感じで、十六夜は答えた。

「ふふっ面白そうだね。じゃあホームに帰って一回休んでから明日入団試験をしよう

か」

「いいのかフィン？こんな得体のしれないやつを」

「まあまあいいじゃないカリヴェリア」

そこでアイズは何かを思いつたよう、で十六夜に質問してきた。

「十六夜は、寝泊まりする所あるの？」

「ないが、野宿は慣れてるからな別に困ることはない」

「もしよければ、今日は取り敢えず僕たちのホームに泊まりなよ」

「おっ。サンキュ助かるぜフィン」

「どういたしまして。それじゃ話もまとまったところで、帰ろうか僕らのホームへ」

3話 ホームへ帰ろう

ゾロゾロと、アイズたちが所持しているファミリアが道を通っていると、あつちこつちからヒソヒソ話が聞こえた。

「おいあれ、オラリア最強派閥のロキ・ファミリアじゃないか」

「今回は少し怪我人が多い気がするな」

と、言った感じの話が人並みより優れた五感を持つ十六夜には聞こえてきた。

(ふくん、アイズたちが所持しているファミリアは、ロキ・ファミリアって名前なのか) そんな考え事していると、後ろから声をかけられた。

「貴方がミノタウロスを恩恵無しで倒した、逆廻さんですね」

「ん？誰だお前は」

そこに立っていたのは、耳が尖っていて青色の瞳をした、美しいエルフだった。

「あ、すいません紹介がまだでしたね。私の名前はレフィーヤ・ウイリデイス。ロキ・ファミリア所属のLv 3の冒険者です」

「よろしくな、レフィーヤ」

「はい！こちらこそ、よろしくお願いします」

「ところでレフィーヤ。ホームてどんな感じの所なんだ？」

「ん〜そうですね…。一言で言っちゃうと、どうせ建てるなら大きい方が良いだろ的なお城ですね」

レフィーヤはつい苦笑いをしてしまっていた。

「ヤハハ、その建物建てたやつとは気が合いそうだ」

「笑い事じゃないですよ中は迷路みたいですから！新人の人はすぐ迷っちゃって困ってるんですよ」

その他にもレフィーヤと色々な話（主にレフィーヤがアイズのについて語っていた）をしていると、徐々にお城みたいな建物が見えてきた。

「話には聞いていたが、これは予想以上だな」

そこに建っていたのはおとぎ話に出てくるような幻想的なお城だった。

「ちなみに名前は黄昏の館って言ってますよ」

レフィーヤが軽く説明していると、館の扉が勢い良く開いて、そこから人がこちらに走ってきた。

「おつかえええりいいいい」

謎の人物は上記のような奇声に近い言葉を発しながらアイズ達に抱きつこうとした。

アイズはまるでそれを予想していたかのように綺麗に交わしたが、レフィーヤは十六

夜と話していたせいかな、残念ながらの捕まってしまった。

「きやああああ」

赤い髪の女は、レフィーヤに飛び付くやいなやレフィーヤの胸をもみ始めた。

「あつ・ん・いい加減に・してくださーい!!!」

レフィーヤはついに我慢の限界に達し、その赤い髪の女を十六夜に向かって放り投げた。

「よつと」

十六夜はそれを軽く蹴り飛ばすような形で受け止め、その女を地面に落とすとした。

「ゴフツ・・・ ブベラツ」

足で受け止められた時、どうやら顔面を膝にぶつけたらしく、その女は顔を抑えて地面を転がり回った。

それから暫くして痛みが収まってきたのか、立ち上がり、文句を言ってきた。

「おいこら！足で受け止めたの誰じゃ！うちみたいな可愛い美女を、足で受け止めるか普通」

「ハツ逆廻十六夜様だ。受け止めてやったんだから感謝してほしいもんだぜ」

「うるさい！足で受け止められて感謝もあるか！・・・ん？あんた見ない顔やな、なんで此処にいるん？」

先程まで怒りでワナワナ震えていたが、どうやらもう怒りは収まったらしい。

「まあ、その話は後でするとして……ただいま、ロキ」

「ああ、おかえりフィン」

ロキと呼ばれた女は、笑顔で出迎えた。

「あと、今回の遠征では犠牲者なしだ。到達階層も増やせなかつたけどね。詳細は追って報告させてもらうよ」

「んんうー了解や」

「ところで、さつきうちを足で！受け止めた十六夜とやらは、何しにうちに連れてきたん？」

「どうやらロキは、怒ってはいないが少し先程のことを根に持っているらしい。」

まあ、それは置いといて、ロキの質問にはアイズが答えた。

「フアミリアに入れようと思って」

それを聞くとロキは目を丸くした。

「へくアイズがなあ。まあええや、入団試験はいつやるん？」

「明日やるつもりだよ。今日はホームに泊めようと思って連れてきたんだ」

「ほな分かった」

「そう言い残すとロキは、他の団員に絡みに行つた。」

「それじゃ、片付けを手分けして終わらせて解散、以上！」
フィンが方針を決めた瞬間、団員は速やかに片付けに取り掛かった。



20分後

「さてと、これからどうするかね」

十六夜は、片付けを手伝った後、ロキから今日泊まるように言われた部屋に来ていた
コンコン

部屋の扉がそう鳴った。

「誰だ？」

「ん、ちよつと君と話がしてみたくてね」

十六夜は声で、扉越しにフィンだとわかった。

「ちよつと待ってる。今、鍵を開けから」

扉を開けるとそこにはやはりフィンが立っていた。

フィン「邪魔するよ」と言いながら中に入ってきた。

それから暫く話していると、いつの間にか数十分が経過していた。

「どうやら、フィンと十六夜は中々気が合うようだ。」

「おっとそうだった。ついつい話が楽しくてね、忘れるところだったよ。実は、明日の十六夜の試験内容を伝えるために、今回は訪ねてきたんだよ」

「それで試験内容はなんだ？まさか、冒険者の試験なのにペーパーテストなんて言わないよな」

「そう焦るなよ。今回の試験はとってもシンプル：：僕と戦ってもらおう」

この言葉を聞いた途端、十六夜の空気が変わった。

先程まで和やかだった空気が一瞬にして張り詰めたモノに変わった。

「ハッ、随分と面白いことしてくれるじゃねえか。まさか団長様が直々に相手してくれるなんてな！」

「僕は君に期待してるんだ、君の実力見極めさせてもらおうよ。細かい内容は明日伝えるよ。今日は、明日に備えてゆっくり寝なよ」

「ああ、そうさせてもらうぜ」

この後一緒に風呂に入り、お風呂上がりに牛乳を一緒に飲んだ。

お風呂を上がりフィンと廊下を歩いていると、フィンに抱きつかうと飛びかかってき

たやつが居た。(計画は失敗に終わっていた)

フィンの説明によると、ティオナの姉のティオネと言うらしい。



部屋

「(全く、こつちの連中も中々面白い奴らだな)」

古き友人たちのことを少し懐かしみながら十六夜は、瞼を閉じた。

4話 入団試験

目が覚めると、丁度日が登り始めた頃だった。おそらく6時くらいだろう。

「起きたはいいがどうしたもんか、暫くすればおそらく入団試験の説明をしにフィンあたりが来るだろ。その前に朝飯にするか」

入団試験の説明をされてすぐ開始されては、朝食を取る時間がないと判断した十六夜は、ギフトカードから保存食を取り出そうとした。

そうして、やる事が決まったところで、扉をノックする音が部屋に響き渡った。

「はいはい、今開けるよ」

いくらなんでも来るの早すぎるだろ、などと考えながらも、来たものはしょうがないと諦めて扉を開けた。

すると、そこには初めて合ったときとまったく同じ服装をしたアイズが立っていた。

「……………十六夜ご飯食べに行こ」

どうやら何も心配はいらなかったらしい。

—◆◆◆—

「あつ、来たようだね」

食堂に付くとフィンが出迎えてくれた。

「それにしても広いな、全員集まって食べるのか？」

「朝食はね。昼と夜はダンジョンに潜つてたりしてなかなか集まらなくてね」

その他、ちよつとした雑談をしているといつの間にか食堂に結構な人が集まって来ていた。

「そろそろ席つかないとね。どうだい一緒に食べないか？」

「それも悪くはないが……」

十六夜はフィンから視線を外し斜めをチラツと見た。

フィンもそちらの方向を見ると、そこには自分の席の前を確保して、こちらをジツと見つめるアイズがいた。

「なるほど、それじゃあ試験については食べ終わってから話すことにするよ。」

「ああ」

フィンの言葉を背に手をヒラヒラと振りながらアイズの所まで歩いて行った。

アイズが用意してくれた席に座りしばらく待っているとティオネやティオナ、レ

フィーヤなどがアイズの周りに集まり始め、最後には食堂にある席が殆ど人で埋め尽くされた。

そしてフィンの挨拶的なのが終わると食堂が一気に騒がしくなり食事が始まった。

初めは遠征で起きたことについて話していたが、暫くすると今日行われる入団試験の話になっていた。

「ねえねえ！十六夜は今日の試験の話きいてたりしないの！」

朝から元気いっぱいなティオナが興味有りげに聞いてきた。

「詳しいことは聞いてないが、フィンと戦うらしいな」

「ふふつ、可哀想に団長が相手だなんて、不合格確定ね」

今あからさまに煽ってきたのはティオネ。昨日フィンを襲おうとした痴女だ。

「……今失礼なこと考えたでしょ」

「ハッ、まさか誰も痴女だなんて思ってたねえよ」

ティオネが怒りテーブルを乗り越え掴みかかろうとするのをティオナが必死に止めていると、アイズが口を開いた。

「大丈夫……十六夜は合格するよ」

「ヤハハ、初めから落ちる気なんざねえよ」

その後、程なくして朝食を食べ終わり解散するとフィンが話しかけてきた。

「さてと、腹ごしらえもすんだしそろそろ始めようか。ついて来てくれ、中庭で試験を行う」



大人しく付いて行くと直ぐに中庭に出た。何処から聞きつけたのかギャラリーも沢山いて、その中にはアイズもいた。

フィンの中庭の中央に立ちギャラリーにも聞こえるように大きな声で試験の説明を始めた。

「これよりロキ・ファミア入団試験を行う！試験内容は僕と十六夜の一騎打ちで、勝利条件はどちらかが降参するか戦闘継続不可能になった場合のみだ！以上！」

フィンが説明し終わるとギャラリーがざわめき始めた。

それもそうだろう、Lv. 6の冒険者とLvさえない人間が戦えば結果は一目瞭然、当然「団長はなぜこんなことを？」「おいおい死んだはあいつw」などと言う声が上がった。

「さあ、準備も整ったし始めようぜ」

そんな声はどこ吹く風、十六夜は気にも止めず拳を構えた。

「リヴェリア開始の合図を頼む」

フィンの言葉に頷くとリヴェリアは高らかに手を掲げ開始の掛け声をかけた。

「それでは開始！」



Side：フィン

リヴェリアの開始の合図を聞いた瞬間、僕は長年冒険者をやって来た経験から来る直感なのか後方にジャンプしながら守備の体制を取っていた。

そして気がついたときには僕は、はるか後方にあつたはずの柱に体を埋めていた。

「はは、…強いとは思ってたけど、まさかここまで差があるなんてね」

左腕の感覚がない、恐らく左腕で攻撃を受けたのだろう。

もしガードしていなかったらと考えるとゾツとした。

それ以外の所はなんとか動く。少し動かしただけでかなり痛いながらもまだ動ける。

柱から身を起こしフラフラと立ち上がるとリヴェリアが慌てて試合を止めようとし

た。

「この勝負十六夜「待って！」」

リヴェリアが言葉を遮られたことに驚きこちらを見た。

「まだ：： 大丈夫：： だから、まだ負けてない！」

僕はまだ十六夜に負けたくなかった。それは、団長としての意地もあるが、それよりも自分より遙かに強い相手に少しでも手を伸ばしたい、少しでも長く戦いたい、そして、一矢報いたかった。

「ヤハハ、まさか耐えるなんてな。でも、次で終わりだ！行くぞ！」

「ああ来い！」

今の僕じゃ十六夜が攻撃の動いてからじゃ防御もカウンターも出来ない。

なら考えろ！

今までの経験、天性の才能、落ちている瓦礫位置全てを使って次の十六夜の攻撃の軌道を読みきれ！

そして導き出した答えの軌道に槍を添えた。

十六夜は一瞬消えそして自分の予想した軌道上に姿を表し拳を振り抜こうとした。

そうなれば当然十六夜の拳に槍が刺さり一矢報いられると思った。

しかし、十六夜の拳に槍が刺さることはなく槍は先端ごと砕かれた。

「ハツ、やるじゃねえかフィン」

この言葉を最後に、僕の意識は途絶えた。

5話 亀裂

勝負が終わった。

圧倒的、周りからはフィンが手も足も出なかったように見えたらう。

それは事実であり、実際フィンは十六夜に傷一つ付けることは出来ず負けたのだ。

だが、最後フィンは十六夜の一撃に槍を合わせていた。

それが十六夜には気に入らなかった。別に攻撃を合わせられたことではない。自分が槍に刺されなかったことが気に入らないのだ。

自分で手に入れた力なら素直にこの勝利も喜べただろう。

しかし、この力は勝手に渡された力。

こんな物を使って勝つても嬉しくもなるともない。

確かに、獅子座の太陽主権が無くとも十六夜は間違いなく勝っていただろう……..
片腕を犠牲にして。

これは自分が相手を下に見て手加減した対価として本来支払わなくてはならない罰なのだ。

「だが、手に入れちゃった以上これも俺の力だ。折り合いをつけて行かねえとな」

そんな感じで少しモヤ付いているとリヴェリアがフィンに近づき腰につけていたポーチから取り出した瓶に入った液体をかけた。

すると怪我が跡形もなく無くなりフィンが起き上がったので、近づこうと一步踏み出そうとする。すると、横から拳が飛んできた。

少し屈んでそれをかわすと、次は前から蹴りが飛んできたので、それを右腕で受け止める。

蹴りを入れてきた者は防がれたと思うとガードされた衝撃を利用して十六夜から距離を取った。

「随分と荒々しい入団祝いだな。ティオネ」

「うるさい！よくも団長を!!」

よく見るとティオネだかじゃなく、他の団員も武器を持って十六夜のことを囲んでいた。

「ハッ、いいぜ掛かってきな！全員まとめて愛しき大地にキスせてやるよ！」

ティオネを始めとした者たちが地を蹴り出そうとしたとき、中庭に怒声が響き渡った。

「武器をしまえ!!!」

その言葉と同時に途轍もない威圧が十六夜を攻撃しようとした者たちに降り掛かっ

た。

威圧に負けたのか、尻もちをつく者や跳ね上がる者たちも居たが全員例外なく声の持ち主の方に顔を向けていた。

そこに居たのは怒りで顔を歪めたフィンであった。

「お前たちなんのつもりだ？ 家族ファミリーに対して武器を向けるなんて？」

フィンは一番最初に攻撃を仕掛けたティオネに質問を投げかけた。

「彼が家族！? ですが彼はd「十六夜は見事試練をクリアした。ならば彼は家族ファミリーになるのは当たり前だろ！」

ティオネや他の団員は今の言葉に何も言えずに黙ってしまった。

「ハア、お前たちが僕のために怒ってくれるのは嬉しいさ。だけど、今回の件は僕が十六夜を測るのに圧倒的に力不足だっただけの話。十六夜に怒り覚えるのはお門違いってやつさ」

「……はい」

ティオネは不満そうではあるがフィンの言うことなので一応頷いた。

他の団員もティオネにつられ「すみません」などと言って反省している素振りを見せた。

「……じゃあこの話はここまでだ。今日の夜7時から遠征の打ち上げと十六夜の入団

祝をいつもの店でやるから来るだよ。さあ解散。あつ、十六夜は残ってね」

団長の呼びかけで見学していた団員や十六夜に喧嘩売ってきた団員は解散していった。

「……あれは納得してない顔だったな」ボソツ

フィンは先程の団員たちの顔を思い浮かべてこれから起こることに頭を抱えた。



暫く時間が経ち中庭にはフィン、リヴェリア、十六夜の三人だけが残った。

「先程は団員が迷惑をかけてすまなかった。団長として非礼を詫びさせてもらう」

「別に構いやしないさ」

「そう言ってもらえると僕としては助かるよ。ありがとう」

「ところで晴れて入団出来ることになったんだが入団すると何か変わるのか？」

「ロキから恩恵を背中に刻まれるくらいだよ。恩恵には自分の名前とかステータスが記載されるんだ」

それを聞くと十六夜はあからさまに嫌そうな雰囲気を漂わせた。

「他人に名札付けられる趣味はないんだが」

「まあまあ、これはファミリアの目印みたいなものだからさ」

フィンは流石にこれは付けてもらわないと困るので十六夜を説得しようと試みた。もちろんこんなので納得するとは思ってもないが

「……目印か、皮肉なもんだな」

つい向こうのことを思い出してしまった。

向こうでは求めても求めても掴むことの出来なかつた物が、この世界では求めてもないの転がり込んでくるのだ。

これを皮肉と言わずなんと言うのだろう。

「いいぜ、大人しく受け入れてやるよ」

十六夜のこの言葉にフィンは驚いた。

十六夜の性格上そう簡単に首を縦に降るとは考えていなかったからである。

だが、フィンとしては好都合、十六夜の気が変わらないうちに話を切り上げる。

「話がまとまったところで逆廻十六夜。お前はどこでその力を手に入れた。よもや、産まれてから持っていたとは言うまいな」

今までの静観していたリヴェリアが十六夜に問いかけた。

「……ハッ、いつからなんだろうな。産まれたときからなのか、それともそれより前

なのか、何にしても俺にはわからない。そしてその答えを知ることとは一生ないだろう

「さ」

「：。そうか。始めに行つておく、お前の力ははつきり言つて異常だ。強すぎる力とはきに持ち主にさえに牙を向き、強すぎる力は恐怖を生む。十分気をつけよ。しかし、もう手遅れかもしれんがな」

それだけ言うとリヴェリアはマントを翻し後方にある通路に消えていった。

「じゃあ、後は夜まで自由だ。街に出て探索するもよし部屋でのんびり過ごすもよし、好きなことをして時間を潰しな。はいこれ、集合場所を書いた紙。ちゃんと送れずに来てよね。じゃ、僕はやることがあるからまた後で」

フィンは紙を手渡しリヴェリアと同じ方向に消えていった。
「取り敢えず町にでも行つてみるか」

十六夜は新たなる世界の街に期待で胸を躍らせホームを出た。

6話 新たな約束

ホームを出た俺は、特に目的の場所もなく人の流れに沿って街を散策していた。散策していて気づいたが、この世界の街並みはイタリヤのそれに近い。切石で創られた建物が多く木造建築などはあまり見かけなかった。

街の風景について考えながら流されていると、やがて大きな建物に辿り着いた。その建物には、武器を持った者達が入っていったり、出ていったりと忙しく行き交っていた。多分だが、仕事の受注などができる場所なのだろう。

約束の時間まで暇だしダンジョンに行くのも悪くないか。そう思いダンジョンの方を見ていると後ろから声をかけられた。

「やれやれ、確かに夜までは自由って言ったけど、ダンジョンに行くのはやめてくれよ。
フェルナ 恩恵の刻まれてない君がダンジョンに潜ったと知れたら大騒ぎだよ」

振り返ると、そこにはつい先程別れたフィンが立っていた。

「なんだよフィン、もう用事はすんだのか？」

「あらかた終わったところだよ。それよりどうだい、やる事が無いなら僕がこの街を案内するけど」

「団長様に案内して貰えるとは光栄だな」

「決まりだね。じゃあ最初はこつちだ」

———◇◇

こうして、フィンと共に街を回っていると丁度いい時間に約束の場所に辿り着いた。恐らくフィンがこうなる様に案内してたのだろう。

「豊穰の女主人か」

木製の看板にか書かれた文字を読み上げる。

「ロキのお気に入りのお店だね。何か打ち上げがあれば大体このお店に来るんだ。さあ、中に入ろう」

店の中に入るとそこには多くの人々がいた。店に入る前から店の中から笑い声や話し声が聞こえていたがここまで繁盛しているとは思わなかった。

「こつちだ、付いてきて」

フィンに付いて行くと、そこにはロキやリヴェリア達がいた。

「お、来たなフィン。そろそろ始めようと思つとつたところやで」

フィンがロキの近くの席に座ったので自分も適当に空いてる席を探し少し遠くの席に座った。

それから少しして空いてる席もなくなったところでロキが立ち上がり注目するように呼びかけた。

「よっしやあダンジョン遠征みんなご苦労さん!!それに十六夜は入団おめでとう!!今日は宴や!飲めえ!!」

「「「乾っ杯ー!!」」」」

その合図と共に店内はドンチャン騒ぎ、皆がまるで今まで、貯めたモノを吐き出すかのように大騒ぎ状態だった。

一方十六夜はと言うと、一人もくもくと魚の煮付けを食べていた。

まあ、さっきの騒ぎの後じや近づいてくるやつなんているわけねえわな。

そんな感じでテーブルの上の沢山の料理を一人で食べられるという特別待遇を受けると、誰かが反対側の席に座った。

魚に向けていた顔を上げるとそこにはアイズがいた。

「どうした?酔っ払って席でも間違えたか、ほらお前がさっきまでいた席はあつちだぜ」勘違いしたことを危惧しアイズが先程までいた席を指差してやった。

「: : 間違えてないよ。十六夜に: : 聞きたいことがあるの」

「おう?なんだ、俺に答えられることなら答えてやるよ」

「教えてほしい: : なんて: : そんなに強いのか: : 私は: : 強くなりたい: : だか

ら、教えて！」

アイズは珍しく大きな声を上げた。しかし、それはアイズにしてみればの話。その声は周りの騒音に掻き消され限られた者にしか聴こえなかったろう。その程度の大きさ。けれど、その言葉に込められた思いはとてもデカく十六夜には感じた。

「……お前は、何の為に強くなりたいんだ」

「私は……強くなって……今度こそ……失いたくない」

話している間アイズは拳を握りしめていた。まるで自分を責めるかのように。十六夜は確信した。アイズの欲している強さは自分に足りなかった強さだと。

「そうか……残念だなアイズ、俺は強くない」

「嘘！十六夜はフィンを倒した。その十六夜が弱いはずない！」

「……俺は別の世界から来たんだ」

「……？いきなりどうしたの」

アイズは突然突拍子のない話をされて困惑していた。

「まあ、聞けよ。その世界は箱庭つってな——」

十六夜は今までの話した。

箱庭のこと、自分のギフトのこと、世界を救ったこと、この世界に来た理由。

そして何より、3人の女の子の笑顔を守れなかったこと、大切な約束を守れなかった

ことを――

「―てな感じだ。俺はたった3人の笑顔を、約束を、守ることさえ出来ない。こんな偶然の力があつても守れなかった。」

「俺は弱い」

十六夜はいつの間にか俯き力一杯に握りしめられた自分の手を眺めていた。

「十六夜は弱くないよ……」

「ハッ、まだ言うか。いいぜそつちがその気ならこつ――」

そこで十六夜の言葉は止まった。理由は簡単驚いたからである。いきなり顔に手を添えられ強制的に前を向かされ、さらに自分額に相手の額をくつつけられたら誰でも驚くだろう。

「弱くない」

今度は少しムスツとした感じで言われた。

「……十六夜は確かに約束も笑顔も守れなかったかもしれない。けど、十六夜はその娘達仲間の未来とその先にある笑顔を守れたんだよ。それに次も救ってくれるんですよ」

いつもはとぎれとぎれに喋るアイズが今回は一度も詰まることなく喋っていた。それはきつとアイズが本当に伝えたい事だからなのだろう。

「ふっ……いいぜ！見せてやるよ！次こそは涙の余地なく完膚なきまでに救ってやるよ

！」

「：：うん：約束」

額を合わせたまま二人は笑いあつた。

「ア：：アイズと新人がキスしようとしてやがる！」

どこからとも無く声が上がつた。声が上がると殆どの団員はその声を上げた者の指さしてゐる方を見た。その目に写り込んだのはアイズが身を乗り出し十六夜の顔に自身の顔を近づけてゐる姿だつた。

「つち：：ちがー」

いつもなら、このくらいのことなら軽くスルーするアイズであつたが何故か今回はとても恥ずかしく、顔を赤くしながら手をパタパタして否定していると。

「ヤハハ、ついに俺達の熱愛がバレちまつたなアイズ」

「つな／＼／＼ なに：：いつ：：て」

アイズがその言葉を否定しきるより早くモブAが言葉を被せてきた。

「ちくしよお！団長の件といいもう許せねえ！行くぞ皆！」

「そうだ！そうだ！表出やがれ！」

ヤンヤヤンヤ

モブAの掛け声と同調したその他モブ達が講義を始めた。

「ハッいいぜ売られた喧嘩は全て買う主義なんだ。付いてつてやるよ」

それを合図にゾロゾロとモブAを先頭に十六夜達は出て行ってしまった。残ったのは第一級冒険者達とロキぐらいだった。

「あつ… あ… うう／＼／＼」

アイズは十六夜たちが出ていったあと恥ずかしくなって蹲ってしまった。すると、誰かの足音が近づいてきてアイズに話しかけた。

「どうだったアイズ。強くなるヒントはあったか？」

話しかけて来たのは皆のママ… リヴェリアだった。

「無かった…」

「そうか… 残念だな。だが、十六夜といれば何か見えてくるかも知れんな」

リヴェリアがチラリとアイズと見るとこれからのことが決まった様な嬉しそうな顔をしていた。

ふふつ、ダンジョンと鍛錬以外興味のなかったアイズが… 喜ぶべき変化ではあるが少し寂しくもあるな

アイズとリヴェリアが話してる一方、ロキとフィンも話していた。

「はは、彼本物の英雄だつてき！これから面白くなりそうだねロキ」

「ふっん！何が英雄や！ウチのアイズたんは絶対に渡さへんで！」

こうして遠征の打ち上げ兼、十六夜の入団祝は幕を閉じたのである。

—————◇◇◇

余談だが翌日十六夜に喧嘩を挑んだ者たちは皆、頭から壁に埋まった状態で発見されたらしい。